

使用者費用、金融準備、投機的動機

日本大学 宅和公志

セッションのテーマ「ケインズと現代」を念頭に置き、1930年代の社会と現代との違い、とりわけ金融面でのそれを考えると、世界的拡がりと量的拡大には著しいものがある。本報告では、『一般理論』の幾つかの概念を用いて後者（量的拡大）がもつ意味を考える。

まず、同書における「社会全体の所得（Y）」概念が、使用者費用（User Cost：今期の生産によって損耗した設備の補填費用および今期使用した原材料の費用）を控除した後の大きさであったことは、金融現象を含む一般的な経済体系の描写を難しいものにした。すなわち、実物現象はフローの次元（ $Y=C+S$ ）で取り上げられたため、後の研究——たとえば有効需要論——では、使用者費用（および補足費用）から生じる金融準備（Financial Provisions）が視野から落ちることになった。そのためであろうが、流動性選好の利子論（金融現象）もフロー次元（S）の議論だと誤解されたこともある。だが流動性選好とは、貨幣と「蓄積された貯蓄のストック」（GT, p.194）に関する選好であった。貯蓄のストックは、個人貯蓄および企業の金融準備から成る。今日では、とくに後者の拡大が注目に値しよう。貯蓄主体（個人・企業）の行動を支配するのが投機的動機（Speculative-motive）であり、これは市場心理の予測行為に関わる動機であった（pp.158 & 170）。

ケインズのこうした概念を現代の、一日本人としての視点から捉え直すとうなるか。私の場合、使用者費用→不変資本部分、金融準備→財務上の引当金、投機的動機→思惑的動機、と置き換えて理解することが多い。いま投機的動機に言及すれば、日本語の「投機」の語感は「賭博行為（activities of casino）」に近いが、『一般理論』の speculative-motive とは「投機・賭博」的のみならず「思惑」「利殖」的動機でもあった。つまり、一部のプロの投資家（professional investors）や投機家にのみ関わる動機ではなく、余剰資金を運用する企業の様々な思惑や、私たち個々人の胸中にある富保有欲（私的利殖）をも含んでいた。そのように捉えると、投機的動機に基づく流動性選好（貨幣⇔債券の選好）とは、「孤独や不安」を抱えた現代人にとってきわめて切実な問題といえよう。

〈参考文献〉

- 宅和公志〔2003〕『『一般理論』における証券市場の位置づけ』、『証券経済学会年報』38号。
———〔2005〕『ケインズ一般理論・論考』、日本評論社。
———〔2006〕『『一般理論』における資本、貨幣、債券の構図』、『商学集志』76巻2号。
———〔2007〕「「資本」概念の錯綜と Speculative-motive」（『商経論叢』近刊）